

高取町土佐街道における景観評価と地域コミュニティの広がりについて

現代システム科学域・環境システム学類・環境共生科学課程

守道悠夏（下村・阿久井ゼミ）

1.研究目的 土佐街道は、高取藩城下町として栄えてきたが、近年の都市化により歴史街道のイメージが消失しつつあり、街道景観保全の機運が高まってきている。本研究では、土佐街道を対象に、沿道建物の物的環境特性と景観の印象評価、地域コミュニティ活動の広がりとの関係性を捉えることにより、歴史的街並み保全のあり方を探った。

2.研究方法 まず、土佐街道の中で沿道建物が建ち並ぶ約 1.1km を調査対象区間に設定した。また、交差点ごとに区間を設定した結果 15 区間に分け、これらを解析単位とした。物的環境特性については、現地調査（2022 年 9～11 月）と Google map を用いて、沿道建物特性（和風/洋風・平入り/妻入り/陸屋根・歴史的意匠の有無・建物用途）を捉えた。景観の印象評価については、15 区間の両端から撮影した 30 枚の景観写真を用いて、本学域の学生計 36 名を被験者に、13 対の形容詞対を用いた SD 法による印象評価を 2022 年 10 月に実施した。解析では 15 区間に対する印象評価の平均評価点を算出して基礎データを作成した。これらのデータを用いて主成分分析を適用し、クラスター分析による類型化を踏まえ、街道空間の景観特性を探究した。さらに、土佐街道で行われている「雛めぐり」イベントについて主催者へのヒアリング調査を 2022 年 5 月、2023 年 1 月に実施し、第 1□16 回の開催場所を地図にプロットし、イベントの街道筋への広がりや変遷を捉えた。

3.解析結果及び考察 【物的環境特性】建物分類について和風建築が 75%～100%と多い区間は No.2,3,4,5,6,8,10,11,12 で、15 区間中 9 区間を占めており、土佐街道は和風建築が多いことがわかる。特に No.3,11,12 は 100%と全て和風建築である。屋根伏せについては、No.15 の 57%を除いて陸屋根が 0%～18%と少ない。平入りが 60%を超える区間は、No.3,5,7,12 であった。連子格子・虫籠窓の歴史的意匠を含む家屋の割合は No.3 が 50%と多いのに対し、他区間は 0%～36%と少なかった。建物用途について住宅の割合をみると、No.5 の 43%、No.15 の 14%を除き全てが 50%以上であり、住宅として使用されている建物が大半であった。一方、飲食店や小売店舗は No.3～5 区間に集中していた。【景観の印象評価】印象評価調査では、主成分分析の結果から、13 対の形容詞対の評価項目の主成分負荷量を用いて第 1 主成分を「歴史性」、第 2 主成分を「日常性」、第 3 主成分を「賑わい性」と解釈した。次いで、15 区間 30 枚の景観写真の主成分得点を用いて 3 次元布置図を作成した上で、クラスター分析を通じて、タイプ A□B□C□D□E の 5 タイプに類型化した（図□）。これらの類型化の結果を用い

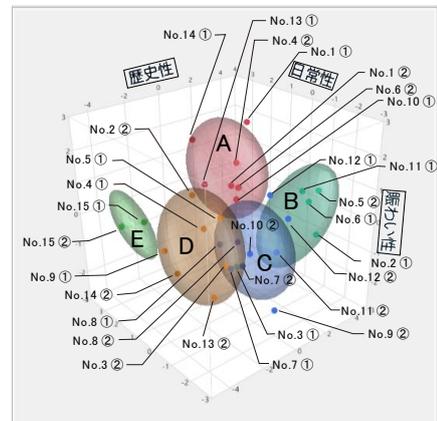


図 1 街道景観の印象評価

て街道区間の景観特性を捉えた結果、タイプⅠ(保全タイプ)、Ⅱ(やや保全タイプ)、Ⅲ(混在タイプ)、Ⅳ(消失タイプ)の4タイプに分類できた。タイプⅠをみると15区間中No.1,6,8,10,11,12の6区間が該当し、全区間の4割の区間で歴史的景観は保全されている。その中で□No.10□12の3区間では保全された町屋が連続している。タイプⅡではNo.4,13,14の3区間みられ、No.13とNo.14が連続して景観はやや保全されており、タイプⅠと合わせると9区間となり、街道の約6割で景観がおおよそ保全されている。一方、歴史的街道景観が失われつつあるタイプⅢは観光振興の拠点である夢創館が位置するNo.2及び街の駅が位置するNo.3とその周辺区間のNo.5,7,9の5区間であり、集客施設や飲食店等が立地する区間が該当している。タイプⅣはNo.15のみであり、街道北端の幹線道路に近い区間では歴史的景観は消失している。【人的ネットワーク】高取町の観光振興の中心人物によって「高取町観光ボランティアガイドの会」が2003年に立ち上げられ、その4年後にイベント「雛めぐりプロジェクト」をスタートさせる。2007年の開始当時、来訪者は8150人であったが、一年で倍増し、県外からも訪れるようになった。【雛めぐりイベント】プロジェクトメンバー10名で当イベントへの参画を説得した結果、イベントに協力した城下町での総家屋数は36件であり、そのうち街道沿いでは24件が参加されていた。翌年の第2回目では、リピーターと口コミによりさらに19件増え、43件となった。それ以降、第8回までは1□4件程度微増したが、第9□12回になると1□2件が減った。第13回で1件増えたものの、コロナ禍で第14回が中止になり、第15回では3件、第16回では5件減少した。この減少は、参加者の高齢化が主な要因であり、新たな担い手育成が存続の鍵を握っている。第16回のイベント参加家屋40件の位置をみると、観光振興拠点があるNo.3で13件と全体の□割程度を占め、他区間と比べて集中している。参加家屋の建物用途では、飲食店・小売り店舗といった商業系が半数を示している一方で、個人の住宅が12件も参加しており、沿道住民への意識の広がりを感じさせられる。

4.まとめ 土佐街道では、和風家屋が6割程度存在し、歴史的イメージ保全に寄与しているが、歴史景観が保全されている区間と和・洋風家屋が混在する区間が交互に存在し、歴史的イメージが連続している箇所は少ない。特に、観光拠点施設や飲食店等が多い区間では、イメージは消失傾向にあった。今後観光拠点施設等の公共施設では、建物外観を保存し、内部をリノベーションする取り組みや、雛めぐりイベント等のコミュニティ活動の担い手育成が重要であり、保全意識を醸成する取り組みや沿道家屋の建替時には意匠・形態・色彩等に配慮する景観保全のルールづくりが求められる。



図2 街道区間ごとの景観特性